



AROUND
THE
WORLD
LIBRARY

ジュール

*La Pêrouse
et les navigateurs français
par Jules Verne*

ヴェルヌ

作



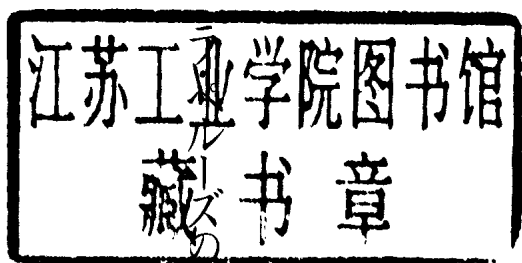
榊原晃三 訳

Sakakibara Kôzo

ラ・ペルーズの 大航海



ジュール・ヴェルヌ作



の大航海

榊原晃三

訳

気球の本

ジュール・ヴェルヌ作 ラ・ペルーズの大航海

榊原晃三 さかきばら こうぞう

翻訳家。法政大学講師。

フランス文学、児童文学。

講談に夢中になった少年時代のままに、活劇、世話物、児童文学と、訳業は多岐にわたる。訳書にルブラン『怪盗ルパン』、M. トゥルニエ『フライデーあるいは太平洋の冥界』、ボンゾン「クロワ・ルス少年探偵団シリーズ」など多数のほか、著書に『ジャンヌ＝ダルク』

『奇蹟・ルルドの泉』などがある。

日本翻訳家協会理事。

1930年愛知県生まれ。

1996年12月逝去。

1997年1月22日 初版第1刷発行

著者●ジュール・ヴェルヌ

訳者●榊原晃三

発行者●宇都宮健一郎

発行所●NTT 出版株式会社
〒153 東京都目黒区下目黒1-8-1
アルコタワー

TEL 03-5434-1010(営業部)

03-5434-1001(出版部)

FAX 03-5434-1008

<http://www.nttpub.co.jp>

装幀●岡本一宣デザイン事務所

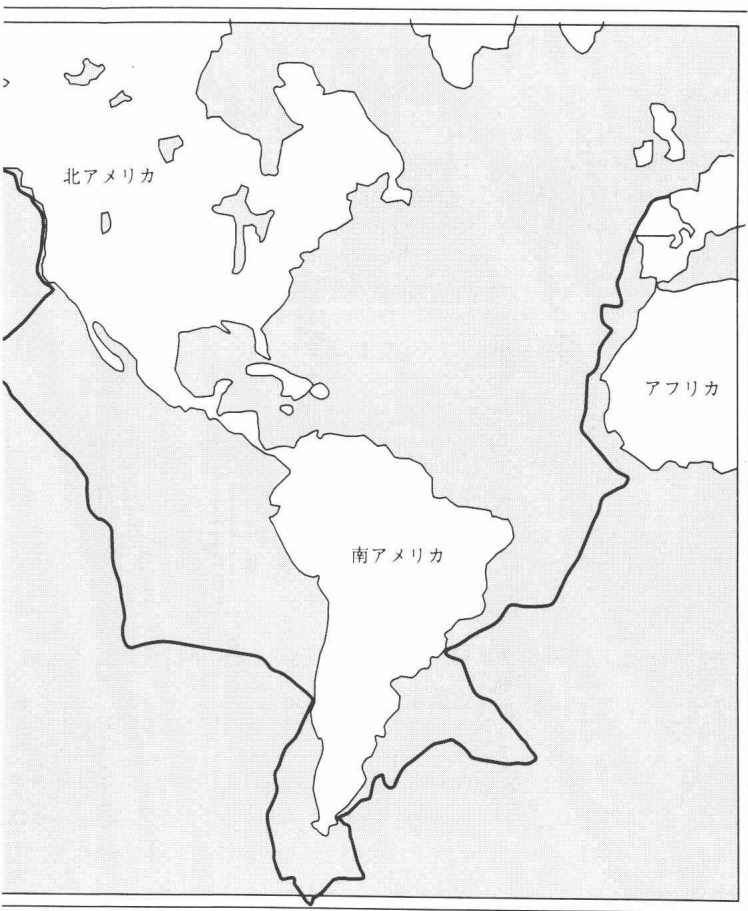
印刷●株式会社厚德社

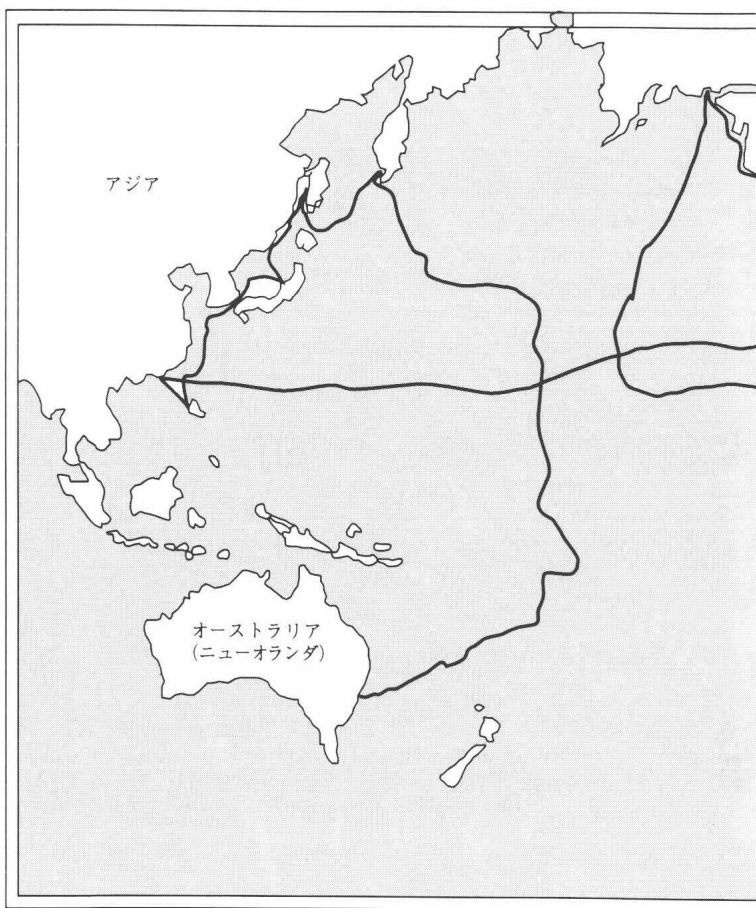
© SAKAKIBARA Kozo

1997 Printed in Japan

ISBN4-87188-631-X C0097

乱丁本・落丁本はお取替いたします。
定価はカバーに表示してあります。





ラ・ペルーズの航路

ジュール・ヴェルヌ作 ラ・ペルーズの大航海
— 目次 —

ラ・ペルーズ遠征航海記 1

1	遠征計画	2
2	ブラジル沖で	6
3	南太平洋へ	12
4	ハワイ諸島	16
5	大惨事	21
6	北アメリカ沿岸	29
7	中部太平洋	36
8	マカオ、マニラ	39
9	日本近海	45
10	ラ・ペルーズ海峡（宗谷海峡）	48
11	南海の悲劇	65
12	搜索開始	82
13	怪情報	85

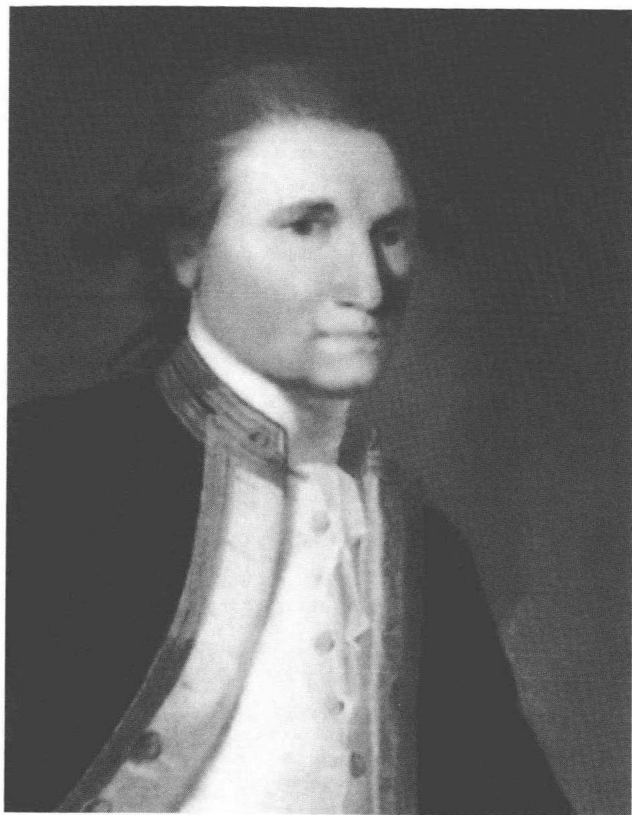
14	ブーガンヴィルへ	88
15	手がかりを求めて	94
16	モルツカ諸島にて	98
17	オーストラリア南西海岸	102
18	フレンドリー諸島の歓迎会	110
19	第二の手がかり	121
20	食人種の島	123
21	不運な結末	134
付	ラ・ペルーズの先駆者たち―オセアニア周航記―	139
	ブヴェ・ド・ロジェ	140
	シュルヴィル	145
	マリオン・デュフレーヌ	164
	訳者あとがき	183

ラ・ペルーズ遠征航海記

1 遠征計画

フランス政府は、つい先ごろ締結された平和条約（一七八三年のパリ条約。これにより、イギリスはアメリカの独立を認め、アメリカを支援して、フランスと和解し、フランスは海洋航海の自由を得た）によつて、海軍は余裕ができたので、これを利用したいと思つていた。イギリスの航海者キヤプテン・クック（通称。正しくはジェームズ・クック）の航海は、当時はまだよく知られておらず、死を遂げたということがわかつていなかった（クックは一七七九年、ハワイの原住民に殺された）。わがフランス海軍の士官たちは、永遠のライバルであるイギリスが、別の舞台で成し遂げた数々の成功に嫉妬心を燃やしていたので、イギリスに負けてなるものかという気高い競争心かられていたようだった。

この重要な探險の指揮権をだれにあたえようか？ 優れた資質を持つ候補者にはこと欠かなかった。そのなかで一人を選ぶという難しさがあつた。しかし海軍大臣はジャン＝フランソワ・



キャプテン・クック

ド・ガローブ・ド・ラ・ペルーズを選んだ。

ラ・ペルーズはいくつもの重要な軍事上の任務によって、トントン拍子に階級を上がり、当時は海軍大臣になっていた。最近の戦役においては、ハドソン湾にあるイギリスの会社の要塞を破壊するという非常にデリケートな任務を遂行した。そして、熟達した軍人として、また巧みな船乗りとして、さらには、なんとしてもことを遂行しなければやまぬ義務感と人道的な感情とを調和させることのできる男として、その任務をみごとにやつてのけたのだった。

副指揮官には、ハドソン湾の遠征でラ・ペルーズを勇敢に補佐したド・ラングルが任命された。ブッソル号（ブッソルは羅針盤の意）とアストロラブ号（アストロラブは天文経緯度測定器の意）という二隻のフリゲート艦（三本のマストの快速艦）には多数の探險隊指導者たちが同乗した。

ブッソル号にはラ・ペルーズ以下、遠征中に海軍大臣に昇格したド・クロナール、技師モネロン、地理学者ベルニゼ、外科医ローラン、天文学者で科学アカデミー会員のルポルト・ダジュレ、物理学者ラモン、スケッチ画家デュシェ・ド・ヴァンシーとその息子のプレボー・ド・ヴァンシー、植物学者コリニョン、時計技師グリーが乗りこんだ。

アストロラブ号には、ド・ラングル海軍大佐、遠征中に海軍大佐に昇格したモンティ、そして高名な数学者のモンジュが乗船した。モンジュは一七八五年八月二十九日にテネリフェ島（スベ



ラ・ペルーズ

イン領、カナリヤ諸島中の島）で下船し、その後も科学の発展につくした。

科学アカデミーと医学会は、海軍省に多数の報告書を託しておいた。そのなかで、学者たちはさまざまな点について、航海者の注意を喚起していた。結局、当時、港灣海軍工廠所長をしていたフルリュー自身が、図表を何枚も作成し、これがこの時の探険に使われた。クリストファー・コロンブス以来のすべての航海について、もっとも詳しいメモと論証をひとまとめにしたものである。

二隻のフリゲート艦に運びこまれたものは、膨大な量の交換用品、食料品、衣類、約二十トンの甲板つきボート一隻、ビスカイ短艇三隻、マスト、帆一揃い、交代のための作業員などだった。

2 ブラジル沖で

一七八五年八月一日、二隻のフリゲート艦は帆を上げ、十三日後にマデイラ島（モロッコ沖のポルトガル領の島）に投錨した。フランス人たちはイギリス外交官たちに礼儀正しくかつ愛想よ

く迎えられた。このことは、彼らにとつてはおどろきであり、同時にうれしいことでもあった。

十九日、ラ・ペルーズはテネリフェ島に寄港した。

ラ・ペルーズは次のように記している。

『フルリユ、ヴェルダン、ボルダの各氏のマデイラ諸島、テネリフェ島についての見解は申し分ない。それゆえ、われわれの目的はわれわれの器材の正確さを確認することだけである……』。

この言葉から、ラ・ペルーズが先駆者たちの仕事を認めていたことが察せられるし、彼のそういった姿勢はその後の記録からもたびたびうかがえる。

天文学者たちが天文時計の進度を測定するのに時間を割いている間に、博物学者たちは、大勢の士官たちとともにピック山に登頂し、いくつかの興味深い植物を採集した。

モネロンは、この山の高さを、先駆者のヘルベルディーン、フィエ、ブギユエ、ヴェルダン、ボルダよりもより正確に測ることができた。先駆者たちはそれぞれ、二四〇九、二二一三、二一〇〇、一九〇四トワズ（昔の長さの単位。一トワズは約一・九五メートル）という数字を出していた

のだ。しかし、残念ながら、モネロンの業績がフランスにつたわることは決してなかった。つたわっていれば、論争にピリオドが打たれていたことだろう。

十月十六日。諸島というよりも岩山群というほうがよいマルティン・ヴァス（ブラジルのはるか沖にある）の島々が認められた。ラ・ペルーズは船の現在位置を測定した後、西方に約九里（二里は約四キロメートル）しか離れていないトリンダデ島（ブラジル沖）に向かって進路をとった。彼は遠征の指揮者としての責任から、その島でいくらかの水、薪、食料を調達できたらよいと願ったのだった。一人の士官を乗せて短艇が陸地に派遣された。その士官は、その地のポルトガル政府代表と連絡をとった。ポルトガルの駐留隊は二百名近い兵士たちで構成されており、兵士たちのうち十五名は軍服を着ているが、その他はシャツ一枚だった。窮迫ぶりは一目瞭然だった。フランス人たちは、ここでは何も調達できずに、再び乗船しなければならなかった。

その後、アセンション島を捜したが見つからず、結局、ブラジル沿岸のサント・カトリヌ島に到着した。

シエ・ミューロー將軍によって発行された航海記のなかには、次のように書かれている。

『九十六日間の航海だったが、一人の病人も出さなかった。』

氣候はヨーロッパとは非常に異なっていた。それに雨や霧の日も多かった。しかし、乗組員の健康状態は至極よかった。それは、われわれの食料の性質が非常にすばらしかったからである。経験に基づいてありとあらゆる用心が講じられていた。もっとも苦心したのは、乗組員に陽氣さを失わせないことだった。そのために、毎夕、仕事が多少はひまな八時から十時までの二時間、ダンスの会を催した』。

この記録の執筆中に何度も話す機会のあるサント・カトリヌ島は、南緯二七度一九分から二七度四九分の間にある。東西の幅が二里しかない。大陸との間には、運河があり、運河のいちばん狭いところは二〇〇トワズしかない。

ノストラ・セニョーラ・デル・デステロの町は、この運河の湾口に建設されている。この町が島の中心地で、ここに長官が居を構えている。町の人口は三千人を超え、約四百軒の家があり、その外観はきわめて感じのよいものだった。

フレジェの報告によると、この島は、一七一二年には、ブラジルのおちこちで救助された漂泊者たちの憩いの場所として使われていた。だから、漂泊者たちは名目上はポルトガルの国民だが、実際は自分たちの支配者を一人も認めていなかった。土地が肥沃だったので、彼らは近くの住人